ひととき

第2回

映画雑学

戸田奈津子

字幕の「嘘」
「ダンス・ウイズ・ウルブス」

一九七〇年のこの作品は、二枚目スター、ケビン・コスナーが自ら製作・監督・主演してこの年の主要アカデミー賞を総なめにした。

南北戦争のさなか、戦場で孤立した北軍の少尉が、ネイティブ・アメリカンたちと心を通わせていくという、大自然を背景とした感動ドラマだが、「字幕」という点からも、これは画期的な作品なのである。

それまでのアメリカ（そして大半の外国）では、映画に字幕のつくことがほとんどなく、戦争映画でドイツの兵隊同士が英語をしゃべっている、という「嘘」がまかり通っていた。

だが、この映画は言葉の通じない主人公とネイティブたちが、少しずつ理解し合っていくというのが物語の核心。コスナーは映画の後半をほとんど字幕にするという大冒険に挑み、見事に成功した。以来、アメリカ映画から言語の「嘘」は劇的に減少。「ラスト・サムライ」で幕末の日本人同士が英語を話すというナンセンスも避けられたのである。

『ダンス・ウイズ・ウルブズ』
製作：1990年　米
監督：ケビン・コスナー
出演：ケビン・コスナー／メアリー・マクドネル／グラハム・グリーン
配給：東宝東和配給

〈著者プロフィール〉映画字幕翻訳者　津田塾大学英文科卒。好きな映画と英語を生かせる職業、字幕づくりを志すが門は狭く、短期間のＯＬ生活や、フリーの翻訳種々をしながらチャンスを待つ。その間、故清水俊二氏に字幕づくりの手ほどきを受け、1970年にようやく「野生の少年」「小さな約束」などの字幕を担当。さらに10年近い下積みを経て、1980年の話題作「地獄の黙示録」で、本格的なプロとなり、以来、1000本以上の作品を手がけている。来日する映画人の通訳も依頼され、長年の友人も多い。
最近の作品：「レッドクリフ」「ワルキューレ」「天使と悪魔」など多数
最近の著書：『字幕の花園』（集英社　2009年）

名優は名監督
「リバー・ランズ・スルー・イット」

ロバート・レッドフォード、クリント・イーストウッド、メル・ギブソン、ジョージ・クルーニー。この四人の共通点は？「四人とも、ハリウッドを代表するスーパー二枚目たち」……そう、正解だ。

だが、それだけではない。四人とも今やハリウッドを代表する名監督でもある。最初の三人はアカデミー監督賞にも輝いているのだから、腕前はハンパではない（まだ若いクルーニーも候補にあげられて、いずれ獲得するだろう）。四人の作風はもちろん異なるが、一つだけ共通しているのは「作品を通して、必ず自分の言いたいこと、主張を表現している」こと。決して行き当たりばったりに企画を選んでいるのではない。その筋の通った映画づくりの姿勢が何よりも素晴らしい。

たとえば、レッドフォードは「親子の絆（きずな）」へのこだわりが強い。ご紹介した作品は、彼の若いころそっくりのブラッド・ピットを主役に据えたある一家の物語。息をのむほど美しい渓谷を背景に、悲劇がこの一家を襲う……。

『リバー・ランズ・スルー・イット』
製作：1992年　米
監督：ロバート・レッドフォード
出演：ブラッド・ピット／クレイグ・シェファー／トム・スケリット
配給：東宝東和配給